

# 十津川村復興モデル住宅

〔応募者名〕氏名：十津川村長 更谷慈禰 勤務先名：十津川村役場 勤務先住所：奈良県吉野郡十津川村大字小原 225-1  
 連絡先（勤務先） TEL：0746-62-0001（代表） FAX：0746-62-0580 E-mail：kensetsu@vill.totsukawa.lg.jp

## ●はじめに

十津川村は平成 23 年の紀伊半島大水害により死者 7 名、行方不明 6 名、全壊家屋 18 棟、半壊家屋 30 棟の被害を受けた。林業再生・復興に取り組み始めていた村では、県が建設する応急仮設住宅を十津川産材で建設するよう要望、地元の十津川大工の施工による木造仮設住宅が 30 戸建設された。

平成 24 年度に入り、村では水害からの本格的な復興と地域の再生や林業振興を目的とした「十津川村復興モデル住宅」（以下「モデル住宅」という。）の建設を企画した。モデル住宅には、被災者の自力再建住宅・村営住宅のモデルであるだけでなく、村の地域性にも配慮し、十津川産材の魅力を存分に活かすことに加え、省エネで快適、高性能、低コスト住宅であることを求めた。このモデル住宅は平成 25 年 7 月 31 日に竣工を迎えている。

## ●地域性への配慮事項

日本一大きな村である十津川村は、急峻な斜面に貼りつくように民家が点在し、石垣や棚田と一体となった美しい集落景観を形成している。年間降水量が 2314 mm ときわめて多く、雨風から建物を守るために軒を低くし、スバルノフキオロシやウチオロシといった独特の建築様式が発達してきた。

モデル住宅の検討に当たって、村内の伝統的な民家 12 棟の調査、十津川大工とのワークショップ、村民へのグループヒアリングを行い、「十津川らしい住まいづくり 25 の手法」として整理した。

## ●モデル住宅の概要

【平屋建てタイプ】約 60 ㎡、建設費約 1100 万円。高齢者の二人暮らしをイメージし、村の伝統的な和室の所作（浅床、書院、位牌置き場、竿縁天井）と勾配天井の居間が続き間で使える。

【二階建てタイプ】約 85 ㎡、建設費約 1500 万円。子育て世代をイメージし、どこにいても家族の気配が感じられるよう階段や吹抜けの位置を工夫している。将来子供部屋が足りなくなった場合は、吹抜けに床を設けて増築することができる。

## ●モデル住宅の特徴

【十津川杉の活用】村の人工林は杉：桧＝7：3 であり、10 齢級を超える杉が豊富にあるため、杉の間伐材からとれる最大寸法 4 寸×7 寸を梁材とする構造計画としている。十津川杉の魅力を活かすため、内部は柱・梁を見せる真壁造りとし、大黒柱・差懸居など骨太に材を用いている。外壁、床、天井、木製建具も含め、平屋建てで約 21.6 ㎡、二階建てで約 28.6 ㎡の十津川産材を活用した。また、村の豊富な森林資源を活用

するために薪ストーブを設置している。

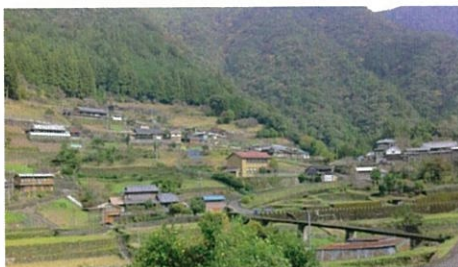
村では十津川杉の多角的な商品化を進めており、十津川杉の家具（ダイニングテーブル、ベンチ、座卓）、十津川杉合板を使用した。また被災者向けの村営住宅では十津川杉断熱材を採用する予定である。

【自立循環型住宅】自立循環型住宅への設計ガイドラインに基づき、自然エネルギー活用、建物外皮の熱遮断、高効率設備機器の 3 分野 13 要素技術を、村の気象条件にあわせてバランス良く組み合わせることで、コストパフォーマンス良く、2000 年の一般的な住宅より約 42% のエネルギーを削減している。

## ●今後の展開

平成 25 年度中には、被災者向けにモデル住宅と同様の村営住宅など合わせて 14 戸建設する予定である。同時に自力再建する被災者には、モデル住宅を活用した設計相談会を開催する。将来的には、設計者・施工者のグループ化を図り、「十津川杉住宅」として地域住宅ブランドを確立し、展開していく予定である。

村では、先人の先年の歴史を未来に繋げるため、森に寄り添って住まう村の暮らしを守り育て、森林資源・環境を活かした村おこしを行い、復興モデル住宅をきっかけとした村民同士の支え合い・助け合い精神による村づくりを進めている。



石垣や棚田と一体となった美しい集落景観



十津川村の景観要素（スバルノフキオロシ、板壁、生垣、板塀、石、菜園）を備えたモデル住宅



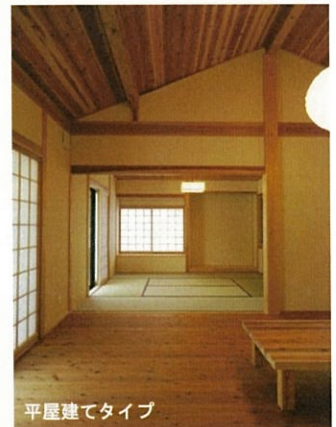
十津川らしい住まいづくり大工WS



村民参加型の検討プロセス



十津川大工による手づくりの家



平屋建てタイプ



二階建てタイプ